

強者の戦略

こんにちは。日本史の岡上です。研伸館の夏期講習では毎年「日本文化史特講」という授業があり、5日間で日本文化史を概観します。様々な美術品や工芸品の話をしていると、「本物」を見たいくなる衝動に駆られ、休日を利用して奈良国立博物館に行ってきました。ちょうど『頼朝と重源』という特別展示があり、今回取り上げた東大の問題を彷彿とさせるような内容でした。南都焼き討ちという未曾有の法難に対し、大勸進として再興事業を指揮した重源、一方で後白河法皇の死後、復興事業の最大の外護者となった源頼朝。この二人の人物を通じて、東大寺の復興のプロセスが描かれた展示になっていて、楽しめました（展示会の図録まで買ってしまいました…）。



さて今回は「院政期から鎌倉時代にかけての仏教の動向」についての問題でした。仏教の動向に関する出題としては「2007年[2] 中世の禅宗文化と浄土真宗・日蓮宗の動向」以来の出題となりました。政治史や外交史もさることながら、文化史もしっかり取り組んでおきたいですね。

それでは解説を始めていきましょう。

<院政期から鎌倉時代にかけての仏教の動向>

(1) 寺院の造営の方法にみられる理念の相違

まずは設問Aからみていきましょう。

設問

A (1)と(2)では、寺院の造営の方法に、理念のうえで大きな相違がある。それはどのようなものか。2行以内で述べなさい。

設問Aで問われているのは(1)と(2)の、寺院の造営の方法における理念のうえでの相違点。「造営の方法」の相違点ではなく、「理念」の相違点を述べなければいけません。ただ、いきなり「理念」を考えるのは難しいので、ひとまず「造営の方法」を比べていきましょう。

はじめに資料文(1)から読んでいきます。

(1) 院政期の天皇家は精力的に造寺・造仏を行った。白河天皇による法勝寺をはじめとして、大規模な寺院が次々と建立された。

資料文(1)にははっきりと「造営の方法」は記載されていませんので、ここは知識で補っていく必要があります。つまり、院政期における天皇家は白河天皇による法勝寺をはじめとして、六勝寺と総称される寺を次々と建立しましたが、それらの費用は天皇家に奉仕する中下級貴族（受領など）の成功（一定の銭・米・絹などの財物を宮中の行事費や寺社造営費として官に納めて、官職や位階を受ける売官の一種）によって調達されていたということを確認しておきましょう。

続いて資料(2)を読みます。

強者の戦略

(2) 平氏の焼き討ちにより奈良の寺々は大きな打撃をこうむった。勸進上人重源は各地をまわって信仰を勧め、寄付や支援を募り、東大寺の再興を成し遂げた。

資料文(2)では、東大寺の再興に際して、勸進上人重源が各地をまわって、様々な人々から寄付や支援を募ることで、その費用を調達したことが読み取れます。

ここまできをまとめると、

(1)では造営の費用は天皇家に奉仕する中下級貴族の成功によって調達されたのに対し、(2)では造営の費用は各地の様々な人々からの寄付や支援によって調達された

となります。しかし、これはあくまで「造営の方法」の相違点であって、問われている「理念」の相違点ではありません。では「理念」とは何なのか。ここでヒントとなるのが、(2)の「勸進」の意味ではないでしょうか。

そもそも「勸進」とは、寺院の建立や修繕などのために信者や有志者に説き、その費用を奉納させることで、その行為を通じて人々を仏道に導き入れ(結縁)、将来のための善行をなさしめる(作善)ことでした。つまり、**重源による勸進活動に参加することで、様々な階層の人々は世の乱れ(平安時代末期からの政治的・社会的混乱)を正し、仏教を通じて社会秩序を回復させることができると考えていた**といえます。では、翻って(1)の「理念」を考えてみましょう。天皇家に奉仕する中下級貴族が成功を行うのは、そこに私的な関係を築くことで、官位や位階を受けることを目的としています。つまり(1)にあるような**造寺・造仏は宗教的な活動というより政治的・経済的な活動であり、天皇家への忠誠心を示すことで、天皇家の保護を期待する行為であった**とい

えるのです。

以上をまとめて、解答を作成しておきましょう。

【解答例】

A(1)では中下級貴族が天皇家への忠誠を示したが、(2)では仏教を通じて階層を越えた広範な協力による社会秩序の回復が期待された。(60字)

(2) 鎌倉時代の新仏教と旧仏教の展開

続いて設問Bです。

設問

B 鎌倉時代におこった法然や親鸞の教えは、どのような特徴をもっていたか、また、それに対応して旧仏教側はどのような活動を展開したか。4行以内で述べなさい。

設問Bで問われているのは、

- 鎌倉時代におこった法然や親鸞の教えの特徴
- それに対応して旧仏教側が展開した活動の内容の2点です。まずはaをみていくために資料文(3)を読んでいきましょう。

(3) 鎌倉幕府の御家人熊谷直実は、法然が「罪の軽重は関係ない。念仏さえ唱えれば往生できるのだ」と説くのを聞き、「手足を切り、命をも捨てなければ救われな」と思っておりましたのに、念仏を唱えるだけで往生できるとはありがたい」と感激して帰依した。

資料文(3)では法然が「念仏さえ唱えれば往生できるのだ」と御家人熊谷直実に説き、帰依させた様子が描かれています。「念仏さえ唱えれば」、「念仏を唱えるだけ」という表現が繰り返されることからわかるように、**法然は旧来の仏教のもつ戒律**

強者の戦略

を否定し、ひたすらに念仏を唱えること（＝専修念仏）を勧めています。そして、法然といえば『選択本願念仏集』を九条兼実の求めに応じて書いたことから公家にも信者を得たことで有名ですが、御家人（武家）においても信者を得ていたことがここからわかります。また、法然の「罪の軽重は関係ない」という言葉は、弟子の親鸞が唱える「悪人正機説」にも通じる主張ですね。親鸞は阿弥陀仏が救おうと願っているのは、自力で修業を積んで善人だと満足している人よりは、多くの悩みに気付いて悪人との自覚を持っている人であるとの「悪人正機説」を唱え、阿弥陀仏の力にすがるとの「絶対他力を強調」しました。

次にbをみていくために資料文(4)(5)を読んでいきましょう。

(4) 1205年、興福寺は法然の教えを禁じるように求める上奏文を朝廷に提出した。このような攻撃の影響で、1207年に法然は土佐国に流され、弟子の親鸞も越後国に流された。

ここでは法然や親鸞の教え（＝専修念仏）に対して興福寺（旧仏教）側が朝廷に弾圧を求め、それが実現したことがわかります。次に資料文(5)です。

(5) 1262年、奈良西大寺の叡尊は、北条氏の招きによって鎌倉に下向し、多くの人々に授戒した。彼はまた、京都南郊の宇治橋の修造を発願し、1286年に完成させた。

ここからは奈良西大寺の叡尊（旧仏教）の活動の様子をうかがうことができます。まず、「北条氏の招きによって鎌倉に下向し」とあることから、叡尊の活動が北条氏（＝幕府、武家）に受け入れられていたことがわかります。しかし、その後にある「多くの人々」というのはもちろん北条氏（＝幕府、武家）に限った人々ではなく、庶民を含めた広い階層の

人々と考えるべきでしょう（山川出版社の『日本史B用語集』では叡尊は「非人から上皇まで幅広い尊信を得た」と説明されています）。さらに、「京都南郊の宇治橋の修造」という「勸進」の記述からも、叡尊の活動が広い階層の人々に及んでいたことがわかります。

このようにみていると法然や親鸞（新仏教）も、叡尊（旧仏教）も、庶民を含めた広い階層の人々を布教の対象として活動を展開していたという共通点がみえてきます。一方で、叡尊は「多くの人々に授戒した」とあるところから旧仏教の戒律の復興に努めていること、さらに「京都南郊の宇治橋の修造を発願」＝「勸進」から人々に仏法との結縁や作善を求めたというところに、法然や親鸞との相違点を見出すことができます。

以上をまとめて解答を作成します。

【解答例】

B 法然や親鸞は旧来の戒律の意義を否定し、阿弥陀仏の力にすがり、ひたすらに念仏のみを唱える専修念仏を説いた。それに対し旧仏教側は、朝廷に法然らの弾圧を求める一方で、幕府の支持のもと庶民を含めた広い階層の人々に勸進を行い、戒律の復興に努めた。(119字)

さて、いつものように論述問題の解答はもちろん一つではありません。「これはどうだろうか?」「これではだめなのか?」と自分では判断つかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。

それでは次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに!!